

女流作家林芙美子、マレー半島に行く

望月雅彦

林芙美子(1903-1951)の作品の中に「椰子の実」という短篇小説がある。

内容は林芙美子が旅先の大島(現、東京都大島町)で、マラッカの宿で女中をしていた日本女性と再会。その女性との不思議なめぐり合わせを、島崎藤村の「椰子の実」を想起して「人間とは哀れな椰子の実である。運命という広い海原を、椰子の実はさすらう。」と書いている。

このマラッカの宿で女中をしていた日本女性に大島で会ったというのは、彼女の創作であろう。しかし林芙美子がマレー半島のマラッカに行っていたことは事実で、1942年の11月下旬、日本軍占領の時期であった。林芙美子一行は、同年10月31日、広島宇品港を出航、門司港に仮碇泊、翌日シンガポール(当時は昭南と言われていた)向け病院船「志かご丸」で直行、昭南に11月16日に到着した。昭南に暫く滞在。その後ジョホール・バルを経てマレー半島西海岸を北上し、タイ領に近いアロー・スターまで行き、又昭南へ戻り短日間ながら縦断を果たしている。半島部だけではなく、後掲のようにペナン島のヘビ寺も見学したようである。

勿論、物見遊山の旅ではない。林芙美子は陸軍報道部事務嘱託の身分で、日本軍が占領し軍政を布いた南方地域に派遣されていたのである。この時派遣されたのは、林芙美子、美川きよ、小山いと子、水木洋子、窪川(佐多)稲子の5人の女流作家と雑誌編集者、新聞記者など総勢17名であった。陸軍報道部の目的は日本軍政の浸透度や現地人の民情などの情報資料を収集し、その成果を日本国内の新聞、雑誌、ラジオなどで発表させ、戦争プロパガンダに利用することにあった。女流作家の南方派遣を企画したのは陸軍報道部で雑誌を担当していた平櫛孝少

佐であった。海軍では、まだ女流作家まで手を伸ばしていなかったからである。しかし、難題があった。その人選や、女流作家をいかにして南方に送るかであった。

平櫛孝『大本営報道部』(図書出版社、1980)では次のように書かれている。「窪川(佐多)稲子、眞杉静枝、中里恒子、宇野千代の各女史を口説きおとしたときは、心の底で快哉を叫んだ。あとで、宇野女史は不参加を申し出てきたが、これらの女性を戦地まで無事に送るのがこれまた大変な仕事であった。軍用機で北京または上海に送ることも考えたが「軍用機は兵器だぞ。それに女性をのせるのはなにごとだ」とカタブツの上司に一喝されたとき「女はのせない戦車隊」という軍の俗謡があったことを思い出した。

ここに名前の挙がった女流作家のうち南方派遣が確認されているのは窪川(佐多)稲子だけで、他は不参加であった。ということは、この南方派遣は「徴用」ではなく任意参加であったことを示している。日本近代文学の研究書の一部には、「徴用作家」の中にこれら女流作家を含んでいるものも見受けられるが、それは誤りである。

新宿博物館所蔵の林芙美子資料「南方従軍時ノート」には「(1942年)11月23日、朝雨あり。11時シンガポール発 ジョホールを通過してバトハパト(原文ママ、バトウ・パハ)に到る 2時頃。菅原守備隊長に会う。ここは残存せる 小野ヨシ老女に会う。67才の由なり。東京目黒に生れし由。30年間バトハパトに居住。友人をたよってバトハパトに来る由。主人、息子は病死」とある。現在では67才で老女などと書くとお叱りを受けるかもしれないが、なにぶん原文に忠実をモットーとしているのでご寛容願いたい。

同資料に「マラッカにも日本婦人が居た」と記

している。このマラッカ在留日本婦人から簡単なマレー語の単語を習っている。この婦人が短編小説「椰子の実」のモデルかもしれない。同資料「11月27日イボ発朝十時(中略)ペラとは銀の意味。4時頃ペラのサルタン邸に行く、一時間ほどしてケイサツ部長の案内でタイピンに至り、古風たそがれた町を歩く、店にて下着を三枚求める。三円也。公園を見る。守ビ隊あり。」下着などは現地調達していたようで、旅慣れた林芙美子の一面を見ることが出来る。

「11月28日朝州庁に行き総務部長にあふ。海軍に行き蛇寺を見に行く。八マイルの由。夕方まで買い物。夕方七時頃ピナンヒールのケーブルカーにて約二千七百フィート登る。蟬の声あり(後略)」この文章からバタワース近辺から海軍艦艇で8マイル沖のペナン島へ渡り、蛇寺、ペナン・ヒルの見学をしたのだろう。

この資料から林芙美子が積極的に取材活動をしていること、日本人が太平洋戦争のはるか以前からマレー半島に進出していることが分かる。林芙美子はマレー半島縦断の後、ジャワ島、ボルネオ島、バリ島、スマトラ島縦断を果たし、昭南へ戻り空路フィリピン、台湾、上海を経由して1943年5月に帰国している。南方派遣のおよそ8ヶ月間、数千キロを走破している。そのバイタリティは食欲なまでの作家魂と言えるだろう。

昭南に着いた時、新聞記者の取材に対して林芙美子は「南の戦い」を書きたいと言った。林芙美子は日中戦争に従軍、女流作家として南京、漢口一番乗りを果たし、『戦線』、『北岸部隊』などの戦場ルポを出版している。「私は兵隊が好きだ」と書き、戦意高揚の一翼を担って来た林芙美子が同様な目線で「南の戦い」を書こうとしていたのであろう。しかし南方地域も日本軍占領によって「東の間」の安定期にあり、林芙美子が思い描いていた「南の戦い」は無かった。戦争中、積極的に戦争の広告塔として活動していた林芙美子

の目には、占領者側の女性としてマレー半島や旧蘭印の島々の風景やそこに暮らす人々はどうか映っていたのであろう。

林芙美子は1946年頃から敗戦後の退廃的な世相を背景にした短編を諸雑誌に、戦争未亡人や売春婦などを題材に相次いで発表している。一夜にして反戦作家に転身したような変わり身の早さである。長編では『うず潮』、『人生の河』、そして林芙美子の代表作『浮雲』と続く、『浮雲』は戦争下、仏印(フランス領インドシナ)で出会い愛し合った日本人の男女が、敗戦により復員帰国し、退廃的な世相と仏印での甘美な思い出が交錯し進行する愛欲の物語で、林芙美子のニヒリズムの到達点と言える作品である。

『浮雲』の仏印の描写があまりに巧妙なので、この南方派遣時に林芙美子が仏印に立ち寄ったとする日本近代文学者もいるが、林芙美子は仏印に行っていない。女流作家を南方に派遣した陸軍報道部の意図は、前記したように日本軍による軍政を布かれた南方地域の軍政の浸透度、民情の視察それらの情報資料の収集であり、仏印は日本軍が軍政を布いていた地域では無いからである。日本陸軍の意図に反して林芙美子が仏印に行くことは有り得ない。「行き帰りに寄れたのでは」との意見もあるが、行きは昭南直航の病院船であり、帰りは空路でマニラ、台湾、上海、羽田帰国と資料上も明らかであり、行き帰りにも仏印に寄っていないのである。あたかも仏印の地を踏んで書かれたかのように、日本近代文学研究者も惹きこまれてしまう林芙美子の筆力には脱帽のほか無い。

時は移り日本では鳩山連立政権が樹立、外交路線も危なげなく滑り出しているように見えるが、二度と南方(東南アジア)へ林芙美子のような従軍作家を送り出すことの無い、平和な未来を構築して貰いたいと切に願う。